

達成動機に関する構造モデルの検証

The Structure of Achievement Motivation

樋口 康彦

HIGUCHI Yasuhiko

目的

達成動機は Murray(1938)によって、困難なことを成し遂げること、自然物・人間・思想に精通しそれら进行处理し統制すること、障害を克服し高い水準に到達すること、自己を超克すること、他者と競争し、これを凌ぐこと、才能をうまく使い、自尊心を高めることに対する動機として定義されている。

さて達成動機の次元の確認については、これまでの章で述べたように多くの試行錯誤が繰り返されてきている。

例えば筆者らが行った研究として以下のような因子が挙げられている。

142人の会社員を対象にした調査を行い、「仕事・自己向上」「地位獲得」「報酬獲得」「イニシアティブ」という4因子が見つかった(樋口, 1995)。

大学ラグロス部に所属する341人の女子学生を対象にした調査では、「自己向上」「活動」「イニシアティブ」の3因子が見つかった(樋口, 1996)。

大学および大学院に在籍する留学生62人を被験者にした調査の結果、「自己向上」「実践的知識の習得」「日本語の習得」という3つの因子が見つかった(樋口, 1997a)。

大学生293人(男性150人, 女性143人)に対する調査の結果、「課題への取り組み」「イニシアティブ」「自己充足」「他者への優越」「活動の合理化」という5つの因子が見つかった(樋口, 1997b)。

大学生256人(男性142人, 女性114人)に対して、達成動機イメージに関する調査を行い、「継続」「自己向上」「イニシアティブ」「挑戦」「活動の合理化」「競争」の6因子が見つかった(樋口, 1998b)。

小学校4-6年生の児童, 計259人(うち男子124人, 女子135人)に対して調査を行い、「課題への取り組み」「イニシアティブ」「学習」「未来における成功」「競争」の5因子が見つかった(樋口, 1998a)。

男子高校生154人に対して調査を行い、「課題への取り組み」「イニシアティブ」「学習」「競

争」「活動の合理化」という5つの因子が見つまっている(樋口, 2005)。

どの調査においても恒常的に複数の因子が確認されていることから、達成動機が多次的構成を成していることは間違いがないと思われる。

さて、社会を前進させるエネルギーである達成動機が、どのような因子構造を形成しているかを検証することは非常に重要である。しかしこれまで達成動機の次元性の確認から潜在因子にまで言及した実証的研究は少ない。

そこで本研究は、樋口(1998b)のデータを基に共分散構造分析によって達成動機の構造モデルを検証することを目的に行う。

方法

調査

調査時期 1994年12月。

被験者 大学生男女256人(男性142人, 女性114人, 平均年齢21.1歳, 詳細についてはTable1参照)。

Table1
被験者の属性一覧(N=256)

年齢(歳)	平均=21.13, SD=1.09, レンジ=18~25
学年	1年生=14名, 2年生=14名 3年生=156名, 4年生=72名
性別	男性=142名, 女性=114名

質問紙の構成

1. 達成動機測定項目 (a)継続: 最後までやり通すー最後までやり通さない, 忍耐力のあるー忍耐力のない, (b)挑戦: 挑戦することを好むー挑戦することを好まない, 新しいことに意欲的に取りくむー新しいことにしりごみする, (c)イニシアティブ: リーダーシップのあるーリーダーシップのない, 人を引っ張っていくー人についていく, (d)競争: 負けず嫌いなー負けず嫌いでない, 競争的なー競争的でない, (e)活動の合理化: 能率的なー能率的でない, 時間を大事にするー無駄な時間を過ごす, (f)自己向上: 向上心のあるー向上心のない, 人間として成長しようとするー人間として成長しようとししない, (g)未来志向: 将来のことを考えているー将来のことを考えていない, 目標をもったー目標をもたない。以上の項目を作成した。

そしてこれに「自分に厳しいー自分にやさしい」, 「努力するー努力しない」, 「こつこつと頑張るー怠け者な」, 「きちんとするーいいかげんな」を加えた合計18項目を達成動機測定項目

とした(樋口, 1998b)。そしてこれらの形容詞を両端に配置し、各自にもっともあてはまる個所に丸をつけるよう求めた。7件法である。

なお測定項目はバイアスを避けるためランダムに配置し、ポジティブな形容詞(高い達成動機を表す形容詞)とネガティブな形容詞(低い達成動機を表す形容詞)が左右ランダムになるようにした。

なおこの分析に用いるのは樋口(1998b)で収集されたデータのうちの自己達成動機イメージである。

結果

分析1 達成動機測定項目の因子分析

18項目に対し因子分析を行った(主成分法, プロマックス回転)。結果はTable2に示す通りである。

第Ⅰ因子 「忍耐力のある」、「最後までやり通す」等が高い負荷を示している。これらの形容詞に共通している概念は、ある課題に対し根気強く取り組むということである。そこで「継続」に対する動機の因子と命名する。

第Ⅱ因子 「将来のことを考えている」、「目標を持った」、「向上心のある」といった形容詞が高い負荷を示している。この因子には未来における成功に対する動機測定項目として設定したものと自己向上に対する動機測定項目として設定したものが混在している。このことはイメージから達成動機をとらえた場合、未来志向的である人が自己向上的な人であると、言い換えれば自己向上的な人とは将来のためにがんばる人である、ということを表しており興味深い。そこで、当初未来における成功として設定した形容詞は自己向上の上位概念であると考え、第Ⅱ因子は「自己向上」に対する動機の因子と命名する。

第Ⅲ因子 「リーダーシップのある」、「人を引っ張っていく」といった形容詞が高い負荷を示している。これらの形容詞はイニシアティブを取る人の行動特性を表している。そこで、「イニシアティブ」に対する動機の因子と命名する。

第Ⅳ因子 「新しいことに意欲的に取り組む」、「挑戦することを好む」といった形容詞が高い負荷を示している。これらの形容詞は挑戦的な人の行動特性を表している。そこで、「挑戦」に対する動機の因子と命名する。

第Ⅴ因子 「能率的な」、「時間を大事にする」といった形容詞が高い負荷を示している。これらの形容詞は自分の活動を合理化し、時間をうまく使う人の行動特性を表している。そこで、「活動の合理化」に対する動機の因子と命名する。

第Ⅵ因子 「負けず嫌いな」、「競争的な」といった形容詞が高い負荷を示している。これらの形容詞は人と競い合うことを志向する人の行動特性を表している。そこで、「競争」に対する動機の因子と命名する。

Table2
達成動機測定項目の因子分析結果

項目内容	因子負荷量					
	I	II	III	IV	V	VI
13. 忍耐力のある —— 忍耐力のない	<u>.913</u>	.117	.004	-.081	.204	-.050
06. 最後までやり通す —— 最後までやり通さない	<u>.749</u>	.071	-.117	-.164	-.082	.108
02. 怠け者な —— こつこつと頑張る	<u>-.691</u>	.102	-.024	-.160	.126	.024
10. 自分に厳しい —— 自分にやさしい	<u>.665</u>	-.004	.090	.023	-.151	.009
01. 努力する —— 努力しない	<u>.654</u>	-.165	.040	.039	-.051	.047
08. 将来のことを考えて —— 将来のことを考えて いない いる	.103	<u>.846</u>	.009	-.210	.117	-.077
12. 目標をもたない —— 目標をもった	-.003	<u>.698</u>	.041	.250	.044	-.040
15. 人間として成長しよう —— 人間として成長しよう とする としない	.138	<u>-.616</u>	.081	-.283	.289	-.107
07. 向上心のない —— 向上心のある	-.086	<u>.606</u>	.019	.255	.015	.017
03. リーダーシップのある —— リーダーシップのない	.029	.020	<u>.930</u>	.019	-.046	.002
18. 人を引っ張っていく —— 人についていく	-.021	-.013	<u>.890</u>	-.056	.008	.051
14. 新しいことにしりごみ —— 新しいことに意欲的に する 取りくむ	.066	.072	-.035	<u>.827</u>	.188	.099
05. 挑戦することを好む —— 挑戦することを好ま ない	.061	-.082	-.011	<u>-.700</u>	-.069	.180
11. 能率的でない —— 能率的な	.050	-.107	-.049	.234	<u>.859</u>	.005
04. 無駄な時間を過ごす —— 時間を大事にする	-.173	.057	.006	.099	<u>.663</u>	.010
16. いいかげんな —— きちんとする	-.383	.180	.033	-.272	.413	.093
17. 負けず嫌いな —— 負けず嫌いでない	.058	-.052	.021	.057	.078	<u>.880</u>
09. 競争的な —— 競争的でない	-.038	.032	.028	-.067	-.035	<u>.845</u>

因子名		因子間相関					
		I	II	III	IV	V	VI
第I因子	継続	1.000					
第II因子	自己向上	-.553	1.000				
第III因子	イニシアティブ	.256	-.274	1.000			
第IV因子	挑戦	-.119	.230	-.401	1.000		
第V因子	活動の合理化	-.412	.425	-.246	.015	1.000	
第VI因子	競争	.171	-.238	.418	-.359	-.186	1.000

分析2 達成動機測定項目の2次因子分析

分析1で得られた6因子の上位に潜在因子が存在すると仮定し、因子得点を用いて2次因子分析を行った(主成分法, プロマックス回転)。なお固有値は2.039, 1.110, .867, と推移したので

因子数を2に定めた。結果はTable3に示す通りである。

Table3
達成動機の2次因子分析結果

変数名	因子負荷量	
	I	II
第I因子 継続	.789	.320
第II因子 自己向上	.370	.662
第III因子 イニシアティブ	-.838	-.048
第IV因子 挑戦	.181	.763
第V因子 活動の合理化	.477	.297
第VI因子 競争	.105	.673

註：因子間相関は.270

第I因子 「継続」, 「イニシアティブ」および「活動の合理化」が高い負荷を示している。各因子の元の項目内容も考慮して「現在の課題に対する動機」の因子と命名する。

第II因子 「自己向上」, 「挑戦」および「競争」が高い負荷を示している。各因子の元の項目内容も考慮して「未来志向」の因子と命名する。

分析3 共分散構造分析による確認的因子分析

2次因子分析の結果から6つの観測変数と、「現在の課題に対する動機」の因子と「未来志向」の因子という2つの潜在変数とを持つモデルを作成し、共分散構造分析によって分析した。結果はFigure1に示す通りである。なおパラメータの推定には最尤法を使った。

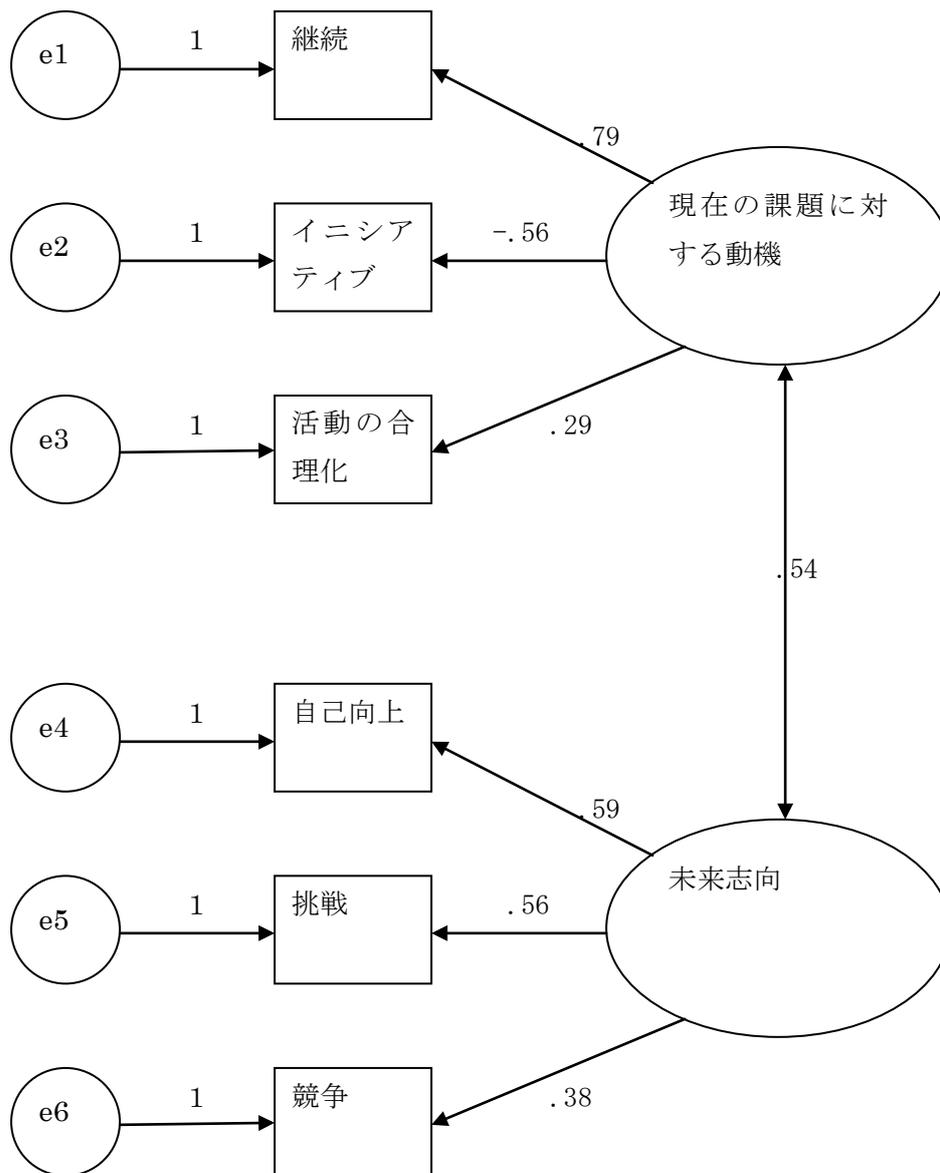


Figure 1 達成動機構造モデルの共分散構造分析結果

モデルの適合度に関してであるが、カイ 2 乗=9.667, $df=8$, $p<.05$, $GFI=.988$, $AGFI=.968$, $CFI=.988$, $RMSEA=.029$, $AIC=35.677$ であった。よって、このモデルは全ての統計的基準を満たし、高い適合性が保たれていると言える。

結果を見てみると、まず「現在の課題に対する動機」の因子に関しては継続が有意 ($p<.05$) なプラスのパス係数(標準化された値, 以下同)を、イニシアティブが有意 ($p<.05$) なマイナスの係数を示している。一方活動の合理化は有意水準に達していなかった。

次に「未来志向」に関しては自己向上が有意 ($p<.05$) なプラスの係数を、挑戦が有意 ($p<.05$) な

プラスの係数を示している。一方競争は有意水準に達していない。

また潜在変数同士は.54 という有意 ($p < .05$) なプラスの係数を示した。

考察

さまざまな達成動機の上位には、目の前にあることに対して一生懸命頑張るという現在の事柄に対する動機と、今いる水準よりもさらに高い水準に達しようという未来に対する動機という2つの次元が存在するようである。潜在因子間の相関係数は有意であったことから、これらの因子は、互いに高い相関を持ちつつも独立した次元であると言える。また今を頑張る人は未来も頑張ろうとするということに理論的な矛盾はないだろう。

それから活動の合理化および競争の因子は潜在因子に対して有意ではなかった。このことは活動の合理化と競争の因子が本研究で想定された潜在因子ではとらえられない独立した次元をそれぞれ形成しているものと考えられることができる。

まとめ

本研究は達成動機の次元性についての総合的なモデルを確立し、構造を検討することを目的に行った。大学生 256 人のデータを基に2次因子分析と共分散構造分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 達成動機の6つの因子(継続, 自己向上, イニシアティブ, 挑戦, 活動の合理化, 競争)の潜在因子として「現在の課題に対する動機」「未来志向」のふたつが確認された。
2. 「現在の課題に対する動機」「未来志向」は互いに関連しつつも独立した次元を構成していた。
3. 1次因子分析の結果見つけた「活動の合理化」と「競争」の因子はそれぞれ「現在の課題に対する動機」「未来志向」と有意な関係を示さず、独立した次元を構成しているのではないかということが推察された。

引用文献

- 樋口康彦 1995 組織の4要因が従業員の達成動機に与える影響について—大卒男子従業員の意識調査から— 応用心理学研究, 20, 11-22.
- 樋口康彦 1996 スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学研究, 36, 42-55.
- 樋口康彦 1997a 留学生のパーソナリティ特性が在日適応感に与える影響について—達成志向性・調和志向性の観点から— 実験社会心理学研究, 37, 150-164.
- 樋口康彦 1997b 性役割認知と達成動機の関係についての考察—大学生男女を対象にして— 青年心理学研究, 9, 19-30.
- 樋口康彦 1998a 児童の達成動機に関する研究 応用心理学研究, 23, 61-69.

- 樋口康彦 1998b 他者の達成動機イメージと自己の達成動機イメージとの関係について 人間科学, 48, 35-56.
- 樋口康彦 2005 ストレス状況に置かれた生徒に対する「生徒指導」方法—達成動機, 対処方略, および適応の関係を基に— 富山国際大学国際教養学部紀要, 1, 1-16.
- Murray, H. A. (Ed.) 1938 Explorations in Personality: A clinical and experimental study of fifty men of college age. New York: Oxford University Press. 外林大作(訳編) 1961 パーソナリティー(上・下) 誠信書房
- 大石展緒・都竹浩生 2009 Amos で学ぶ調査系データ解析 東京図書
- 山本嘉一郎・小野寺孝義(編著) 1999 Amos による共分散構造分析と解析事例[第2版] ナカニシヤ出版